富士講の歴史と地域展開
～東京都練馬区小竹町茅原浅間神社江古田富士～

奥村　南

1. 富士信仰

古来より、山は豊かな生活、生産をもたらす場であり、日本には山を神として崇拝する風習があった。富士山への信仰もそういった人々の山神崇拝によって発生したものである。富士山は日本一高い山であり、美しく神々しい山というイメージがあるが、古代の人々にはもうひとつの富士山の顔があった。記録によると富士山は奈良時代までに大噴火を繰り返しており、その噴火はかなり広い範囲の農地に被害を及ぼした。そのため人々は富士に恐ろしい神、荒ぶる神として畏敬の念を抱き、その崇拝は荒神を鎮めるためのものでもあった。そして山の神を浅間(高い山の一つの形容)大神として仰ぎ、祭祀するようになった。

(1) 修験道と山岳信仰

古代の山岳信仰には仏教の密教的要素がかなり取り入れられており、従来の日本の神道などと融合し修験道というひとつの新しい宗教が奈良時代に成立する。修験道は山岳に登り、厳しい修行をつみ、呪力を体得するという宗教である。山に伏して山に寝起きして修行をするので山伏ともいう。修験道の開祖は役小角（えんのおづぬ）とされており、富士山に初めて登頂したのもこの役小角とされている。仏教の本地垂迹説に基づいて浅間神社の本地は大日如来であると説かれ、固有の神祇思想と外来の仏教思想とが結合し、富士信仰の基礎が築かれた。

室町時代末期になると村山の地に村山三坊（大鏡坊、池西坊、辻之坊）という三つの寺ができ、富士山の修験者たちの修行の根拠地になった。江戸時代に入るまで富士山の信仰の中心は村山三坊が中心になっていた。

(2) 角行藤仏

江戸時代になると、これまでの修験道と異なるひとつの信仰形態を作り上げた角行藤仏という人物が登場し、富士山に独自の信仰形態ができていく。角行は天文十年（1541）長崎に生まれたといわれ、俗名を長谷川左近という。富士山麓にあらわれたのは永禄三年（1560）頃といわれ、富士西麓の人穴とよばれる洞窟で千日の言語に絶する修行、不眠の大行一万八千八百日、断食三百日、富士登山百二十八度などの修行を積んだといわれている。また四寸五分角という細い角材の上に立って一千日の立行を数度するという修行から角行という名がついたとされている。角行は衆生済度を願って願行し、角行の思想は富士山の山霊を大日如来とし、これを信じれば天下泰平、国家安泰となると唱えた。

(3) 食行身禄

角行の死後、五代目月行の弟子の一人に富士講の高祖といわれる食行身禄があらわれる。食行身禄こと伊藤伊兵衛は寛文十一年（1671）に伊勢国に生まれ江戸へ出てきて油商を営んでいた。店をもつ前から身禄は月心の弟子となって

富士登山を繰り返し、富士山の信仰に努めていた。

享保十八年（1733）六十三歳の時、身禄は混乱した世の中を嘆き、なんとか世直しをしようと自ら人柱になることを決意し、富士山八合目の烏帽子岩のわきで厨子を構えて断食行に入り、三十一日目に入定した。その時身禄が口述した教えを弟子の十郎右衛門が筆記したものが『三十一日之巻』といい、富士信仰の人びとの経典となっている。

（4）富士講の成立

身禄の死後、弟子が次々に独立して講を形成していき、江戸八百八講といわれるほどに広まった。身禄入定は富士信仰者たちに大きな影響を与え、身禄三十三回忌の頃には江戸および周辺に身禄を元祖とする多くのこう集団が結成されていった。これに対し幕府は富士講が神道でも仏教でもない独自の教義を説いて町人や農民が組織をつくることを恐れ、数回にわたって富士講の活動に禁止令をだした。しかし富士講の根強い信仰心は絶えることなく、扶桑教、丸山教などと名前をかえて信仰を続けていった。富士講は講元、登山にさいして案内役を務める先達、主に財政の援助をする世話人で組織されており、講社は講員が増えすぎると分裂して枝講を生じた。

（5）富士塚について

富士塚とは、富士講の講徒が、土を富士山の形に盛り上げ、その表面に黒い溶岩塊を貼り付けて造り上げた人造の小型富士山であり、富士信仰の一形式である。

はじめに富士塚が造られたのは安永八年(1779)で、江戸高田（新宿区）に住んでいた造園業を営む藤四郎が、高田の水稲荷社の境内に築いたものといわれている。その後江戸を中心として、その近郊の各地に富士塚築造の風習が広まってゆき、それと同時に富士講も広まっていった。

富士塚は基本設計はあるものの、その形態は椀を伏せたような形の円墳型と、富士三の溶岩塊を急勾配に積み上げ形の石積み型などがあり、大きさもさまざまである。現在でも関東地方には多数現存しており、東京都でも国や都指定の有形民俗文化財となっているものも数多くある。富士講の残っている地域では、毎年七月一日のお山開きには講の先達や世話人などが集まって、富士塚を参拝するところもあるが、参詣者はほとんどいない。

今回は東京都練馬区小竹町にある浅間神社の「江古田富士」について紹介する。

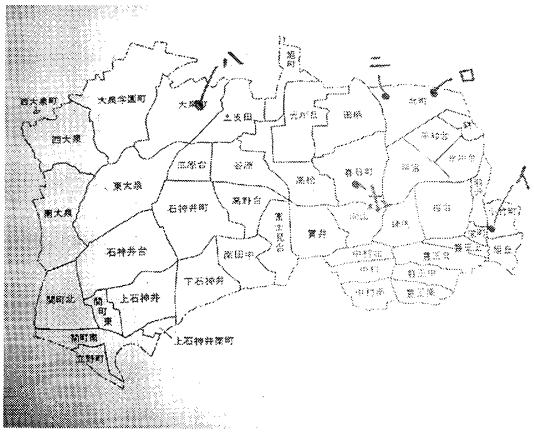
2. 東京都練馬区小竹町茅原浅間神社の「江古田富士」について

（1）調査地

東京都練馬区にはつぎの５つの富士塚が現存している。

イ．江古田富士（小竹町一丁目、茅原浅間神社）
ロ．下練馬富士（北町二丁目、浅間神社）
ハ．中里富士（大泉町一丁目、八坂神社）
ニ．氷川神社富士塚（北町八丁目）
ホ．丸山講富士塚（春日町三丁目、篠田氏邸）

図１　練馬区地図



注：筆者加筆
出所：練馬区地名研究会 1999
『練馬区地名目録［分類索引つき］』

今回は茅原浅間神社の江古田富士について報告する。

江古田富士は茅原浅間神社の境内に築かれた富士塚である。小竹町は練馬区東南の端に位置しており、茅原浅間神社は西武池袋線江古田駅北口をでたすぐ目の前にある。小竹町は旧上板橋村に属し、茅原浅間神社は練馬区旭丘二丁目に所在している能満寺（真言宗豊山派）を別当寺とする富士浅間神社であった。また、板橋区東新町にある氷川神社の境外末社として奉斎されている。祭神は木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）であり、この女神は富士山の神である。神話では木花開耶姫命は妊娠した際に夫の日子番能邇邇芸命（ひこほのににぎのみこと）にその妊娠を疑われ、身の潔白を示すため出入り口のない産屋に火を放ち、そのなかで三柱の火の神々を出産したとされている。この火中出産の物語は収穫儀礼や焼畑儀礼に関わる穀霊誕生の儀礼が背景にはるとも考えられ、また富士山の噴火とも関連付けられている。

茅原浅間神社の拝殿は木造流造りで、拝殿向かって左手に神楽殿と水殿がある。現在の拝殿は昭和二十八年に再建されたものである。拝殿の背後に富士塚が築かれ、頂上の石宮には神社の御神体が祀られている。

写真１　茅原浅間神社拝殿

（２）江古田富士

塚入り口の鳥居から頂上までの高さ約八メートル、直径約三十目メートルの円墳状であり、南側の前面と左右の三方に裾を広げ、後ろ側は傾斜が急である。この塚は古墳であったといわれ、富士塚を築くときに古墳の南側を切り剥いで、墳頂部を積み上げて富士山の山容に構築したと考えられている。

前側にはジグザグの参道（登山道）が一合目から八合目までつくられ、頂上は廻り道となる（残存している合目石は四合目、八合目、九合目のみである）。参道のあちこちに溶岩が配置され、富士山に実在するものを石造物であらわしている。神社内及び塚中の石造物等は全部で三十六あり、講碑や身禄尊祀碑、小御嶽神社碑、天狗、猿などの石造物が建てられている。築造時期は石碑から天保十年（1839）と推定されるが、石燈篭の文化四年（1804）、水盤の文化九年（1812）などの銘もあるため、文化年間の増築ともいわれている。塚は大正十二年（1923）の関東大震災により崩れたが、翌年には講中の協力によって修築された。昭和五十四年には国指定の重要有形民俗文化財とされている。

塚は他地域にはみられない小竹丸祓講（こたけまるはらいこう）によって築かれた。丸祓講は下練馬村、中新井村、上板橋村（練馬区の東側一体の地域）の各講社からなる連合体の組織であった。身禄尊祀碑の銘文によると、昭和八年（1933）同時は先達三名、世話人八名、講員二十二名であったことがわかる。

写真２　江古田富士塚の入り口

（３）丸祓講の活動

現在小竹丸祓講は現存しておらず、神社の宮司も変わっているため先達や講員の方々の話を聞くこと難しい。ここでは昭和五十九年に練馬区教育委員会が調査して明らかになっている丸祓講のようすを紹介する。

昭和五十九年にはまだ丸祓講は存在しており、お山開きや富士登拝も行われていた。当時の先達の田口氏（当時七十六歳）は十七、八才の頃から富士登山を始め、富士登山は三十四回に及ぶという。田口家は先祖代々富士講の先達をつとめ、当時の田口氏は五代目を数える。浅間神社は小竹町に鎮座しているが、氏子は旭丘一、二町目東丁会である。昔はこの旭丘の人だけが講中で、丸祓講の登山講というときには、江古田を中心にして各講社が連合して登山講を結成した。毎年六月一日には山開きが行われ、当日の午前中には氏子が集まり、富士塚を清掃する。清掃後、社殿では六月一日のお拝の行事が宮司をよんで執り行われる。

富士登拝は代参講であり、中新井、下練馬、中村、江古田の各村に講社があり、各講社から何人かが寄り合って代参で富士山へ行った。昭和五十四年当時の講員数十三人前後であった。大正末から昭和初期の頃は豊玉北六丁目あたりに集合し、中の駅まで歩いて行った。そこから中央線で大月まで行き、大月から徒歩で富士吉田市にいたり、御師の家に一泊する。翌日は五合五勺にある小屋に一泊し、翌三日目は御来迎を頂上で拝んだ。頂上では先達が背負ってきた三本の御掛軸を拡げて拝む。下山は一気に行い富士吉田へ出て、小田原に一泊した。翌日は大山不動にお参りしてから帰京していた。その後は交通の便もよくなり、江古田駅から出発して、電車で河口湖まで行き、そこから登山バスで富士山五合目に至り一泊していた。富士登山の時期は八月一日だが、富士講員の方々の中には高齢者も多いため、昭和五十九年当時は江古田浅間神社の富士塚に登山した。

3. おわりに

現在では小竹丸祓講はなくなってしまい、当時の様子を知ることは難しく、昭和五十六年に作成された江古田富士のお山開きの映像記録も劣化が激しく観ることができない。東京をはじめ、関東地方でもいくつか富士講は残っているが、ほとんど壊滅状態である。現在残っている富士講も今の先達が亡くなってしまえばその存在を存続させていくのは難しい状況である。しかし練馬にはまだ現存している富士講もあり、その活動も続けられているため、その実態を調査していきたいと考えている。

参考文献

平野榮次　2004『富士信仰と富士塚』岩田書院
岩科小一郎　1983『富士講の歴史－江戸庶民の山岳信仰－』名著出版
練馬区教育委員会　1984『練馬の富士塚』
練馬区編　1957『練馬区市』練馬区
練馬区地名研究会　1999『練馬区地名目録［分類索引つき］』